

学びの連続性を考慮した幼小接続の在り方

— 年長児後期～1年生前期の子どもの学びの姿における事例から —

長 谷 部 せ り

(本 学 准 教 授)

1. はじめに：研究の背景

「子どもは生まれた時から学び続けているのではないか」筆者はそう考える。それも、受け身的ではなく能動的に学びの主体として存在しているのだと。子どもの学びは連続性の中にあり0歳～18歳までつながっている。しかし、「小1プロブレム」「中1ギャップ」、最近では「高1クライシス」といわれるように、接続期にスムーズに移行ができない現状が社会でも大きな問題とされている。接続期に大きなズレを感じたり、問題が生じたり、つまずいたり、それは子ども自身の問題だけでなく、むしろ環境や制度ひいては教師の関わり方などの影響もあるといえる。それが原因となり、不適応が起きたり、不登校やいじめの問題が生じたりしてしまうこともある。この現状を打破し、子どもの学びを連続性の中で保障していく必要性を強く感じる。

平成29年に告示された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、「3要領・指針」）において「教育に関わる側面のねらいや内容に関して更なる整合性が図られるとともに、小学校教育との円滑な接続を図るよう努めること」が明記された。しかし、「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実」（令和5年2月27日中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会）において「幼児教育施設と小学校（以下、「幼保小」）においては3要領・指針及び小学校学習指導要領に基づき、幼児教育と小学校教育の円滑な接続を図ることが求められている。しかし、家庭や地域の状況の違いを越えて、幼児教育施設の多様性を生かしながら、幼保小の協働により接続期の教育の充実を実現していくためには、未だ数多くの課題がある。」と記されている。つまり、小学校への接続の重要性が長い間叫ばれ続けているものの、現状としては未だに接続期の教育の充実が図られておらず、その課題は多いといえる。

筆者は、幼稚園教諭、小学校教諭としての勤務経験があり、現場において接続の問題に

直面した経験がある。そこで、本稿では接続期とりわけ幼小接続に着目し、「幼小の円滑な接続において何をどのようにつなげばよいのか」ということを幼小接続の実際（対象児の年長児後期～1年生前期の記録）をもとに考察していく。なお、本稿の中で取り上げる事例や実践等は、筆者の幼稚園教諭時代（宇都宮大学共同教育学部附属幼稚園／宇都宮大学教職大学院在学中）のものである。考察は新たに加えることとする。

2. 研究の目的・方法

先述した通り、幼児教育施設から小学校への移行が円滑に行われているとは言えない現状がある。筆者も幼稚園教諭時代に、幼稚園時代はいきいきと毎日登園していた子が、小学校の入学後に登校できなくなったり、教室に入れなくなったりというような問題に直面したことがある。

そこで、本研究では、対象児（K児）の年長児後期～1年生前期の学びの過程を可視化し、それらを考察することで、幼小接続の実際にふれながら、学びの連続性を考慮した接続の在り方を検証することを目的とした。

対象児をK児とした理由は以下の通りである。

対象児を決定するために、年長児前期において、筆者が非参与というかたちで、年長児1クラスの保育観察を繰り返し行い、子どもの姿を記録し積み重ねていった。それらを観察した幼稚園のカリキュラムと照らし合わせ、時期の指導計画を基に、記録した子どもの姿について担任と話し合うことを続けてきた。そこで、時期の指導計画に書かれている、その時期の子どもの姿と重なる姿が多く見られたK児を対象児とすることとした。

本研究では「ドキュメンテーション」という手法を用い、子どもの学びの過程を可視化することとした。ここでいうドキュメンテーションとは、イタリアのレッジョエミリアの乳幼児教育で多く取り入れられ、また重要視されている手法である。ドキュメンテーションには決まった形態があるわけではなく、「見る・聴く」した子どもの姿と、そこから読み取った「意味」を記載しまとめるということである。子どもの学びや育ちの姿を動画や写真にしたり、メモや文章での記録などを活用したりしながら学びの過程を積み重ねることとした。「ドキュメンテーション」が結果をあらわすような、痕跡を残すための記録ではなく、その子の学びの過程を学びの物語として語るものになるように積み重ねていった。

本稿ではK児の年長児後期～1年生前期のドキュメンテーションの一部を事例にし、それらに新たに学びの連続性の視点を入れた考察を加えながら、学びの連続性を考慮した幼小接続の在り方を検証していくこととする。

3. 研究の実際－K児の事例から－

(1) K児の年長児後期の事例

事例1（2021.10.7）

塩ビ管や樋を集めて遊び始めたK児。誰にも邪魔をされないように庭のはじの方を自分の遊び場として遊び始めた。K児は樋や塩ビ管を使ってコースを作っていく。途中、木の実を転がしてみたり、石を転がしてみたりしながら、塩ビ管や樋の角度を調整している。近くで遊んでいた友達がアドバイスをしたり実際にコースを動かしたりして関わることもあった。K児はそれを受け入れて試してみたり自分の思うように組み替えたりしながら遊びを進める。ようやくコースが最後までつながると、K児はバケツに水を汲んできてそれをコースに流した。コースの最後まで水が流れるのを満足そうな顔で見ながら繰り返し水を流す。「できた」と言って嬉しそうである。そのうち「なんで石ではうまく転がらなかったのかな。なんで水だとうまくいったのかな。」「（樋の色が変わったところを指さしながら）水の通り道が跡になっている。」等と言いながらまた水を流して遊び始めた。

<事例1 考察>

K児は、試行錯誤をしながら遊んでいた。その試行錯誤の中で、「なぜ？」と自分なりに疑問をもったり「こうするといいかな。」と自分なりに気付いたりしているようであった。この姿はまさしく「遊びが学び」であるといえる。実際にK児は遊びの中で、傾斜の急・緩やか、重い・軽い、高い・低い、水のかさ、水の流れや勢いの違い、通り道の跡等から水の性質と道具の関係性等々、多くのことを、体験を通して学んでいるようであった。K児は「できた」と満足そうに言った後にも、また水を流して、その後流れたところを確かめていた。K児は「できた」ことがゴールではなく、その後の遊びも楽しんでいるようであった。「できた」ことはもちろんだが、その過程（この事例の場合はできた後の遊びも含む）に多くの学びがある。

幼児期は「体験を通した学び」が重要であり、こうして試行錯誤を繰り返しながら、じつくりと遊ぶ中で、いろいろなことに「気付き」そして体験が深まっていくといえる。そして、体験と体験が積み重なって「知識」となっていくと考える。まさに幼児教育が小学校教育以降の土台となっている、幼児期の学びが小学校以降の学びにつながっているのである。

事例2（2021.10.21）

広い庭の砂場で友達と遊ぶK児。友達と会話しながら遊んでいる。

Y児「いいね。もっと集めよう。たくさんいるからね。」

S児「分かった。みんなで協力してやろう。」

K児「うん。そうすれば早く集められるよね。」

S児「早く集められる方法を考えた。こうして、こうして…。」

Y児・K児「やってみよう。・・・あ、本当だ。」

Y児「この方法いいね。」

このように会話をしながら遊んでいる。この3人は砂場で、道具を使いながらサラ粉（砂場の砂を網のような道具で古い、細かい石とサラサラの砂にわけたもののことを子どもたちは共通して「サラ粉」と呼んでいる）を作っている。途中、どうしても早くたくさん集まるかを話題にしながら実際にいろいろな方法を試しながら行っている。片付けの時間になると、ビニル袋に全員のサラ粉を集めてY児が大切そうに保育室に持っていった。その後はお弁当の時間に。

お弁当の時間が終わると、Y児とS児とK児は真っ先に椿の木の下に集まり、ビニル袋からサラ粉を大切そうに大きな容器に写し、その後小さいバケツに3等分し、それぞれがそのバケツを持って遊び始めた。3人は椿の木にツリーハウスを作っていたようで、バケツのサラ粉と水を混ぜてツリーハウスの土台にセメントを塗るようにそれを塗っていった。

<事例2 考察>

仲間意識があり、仲間との遊びを楽しんでいる様子はこの時期の年長児らしい姿である。単純に遊びの持続時間も年少児、年中児と比べて長く、集中力もある。また、みんなが同じ目的を共有して遊ぶ姿、その結束力は年長児ゆえともいえる。また、ツリーハウスの土台固めにサラ粉を使って固めるというのが適切かどうかという視点よりも、子どもたち自身が考えて遊びを進めていくことに大きな意味があるといえる。実際には、この数日後にこのサラ粉をきっかけに泥団子作りが始まり、さらに遊びが展開していく姿も見られた。

仲間と遊びを進めていく姿は、小学校でのペア学習、グループ学習にいきる経験であるとともに、今後人間関係を構築していくうえでの土台にもなるといえる。

事例3（2021.11.16）

保育室の一角に担任がOHPとスクリーンを用意した。特に使い方を説明することはなかったが自然と子どもたちが集まってきた。子どもたちは思い思いにいろいろなものを映していく。K児も友達にまぎって、ものを映していく。そのうち光源に映すものを近づけてみたり遠ざけてみたりしながら、スクリーンの方にいる友達に「見える？大きい？小さい？」等といいながら映している。OHPにいろいろ映すと、K児は、その後スクリーンの方に行く。嬉しそうにOHPとスクリーンを行ったりきたりしていた。

＜事例3 考察＞

担任が保育室にOHPとスクリーンを用意するも、特に使い方を説明することはなかった。しかし、新しい環境に自然と子どもたちが集まってきた。教師があえて使い方を説明しなかったことには、教師自身に思いやねらいがあることがうかがえる。それは、裏を返すと、子どもたち自身が、気が付いたり発見したりすることを期待しているともいえる。

実際に子どもたちは影を映して遊び、それを何度も何度も繰り返し試していた。そうして遊んでいる中で、映すものが光源に近いと大きく映り、映すものが光源から遠いと小さく映るといった現象を遊びを通して体験・体得していくのである。こうした子どもたちの発見はまさに学びであり、科学的思考の芽生えでもあるといえる。

事例4（2021.12.1）

降園時間に「〇組（クラスの名前）ニュース」とって子どもたちが、その日に楽しかったことやクラスのみんなに伝えたいこと等を共有する時間がK児のクラスにはある（担任が意図的にこの時間を設定している）。この日は「たのしみかい」（楽器や劇などを発表するお遊戯会のようなもの）の当日だったこともあり、「たのしみかい」のふりかえりをみんなで行うことになった。担任が「発表したい人」と声をかけると、たくさん子どもたちが手を挙げた。はじめは手を挙げなかったK児。友達が「緊張したけど、たくさん練習をして本番でうまくできてよかったです。」と発表すると、みんなが大きな拍手をした。何人かが手を挙げて発表し、聞いている人が拍手をするということを何回か繰り返した。K児はしばらく友達の発表を聞いていたが、その後、K児も手を挙げた。K児は「幼稚園最後のたのしみかいだったから楽しんでがんばってやりました。」と答えた。クラスからは大きな拍手があった。

＜事例4 考察＞

子どもにとって園行事は普段の保育では味わえないことを味わう機会でもある。それはK児に限った話ではない。園行事そのものを経験することが子どもの成長に大きくつながることはもちろんであるが、こうしてふりかえったりみんなで共有したりすることが、子どもの充実感や達成感をより大きくさせるといえる。人前で自分の思ったことを伝えることに年長児はとてはりきりを見せるが、こうした経験が小学校の学習につながることはいうまでもない。

K児の発言からもK児自身が「幼稚園最後」ということを意識していることが分かる。「幼稚園最後」という思いが卒園が差し迫るころには「もうすぐ小学生」という思いに変わっていき、そうして子ども自身も小学校を意識していくのだと考える。

事例5（2022.1.11）

担任が「そろそろ片付けにしようか。」というと、子どもたちはそれぞれ片付けを始める。ほうきを持ってごみを集めるW児。絵本をきれいに並べるA児C児。ゴミ袋をもって「ごみはここに入れてね。」と保育室を歩き回るN児。K児は担任に「先生、とけいが何になったらお弁当になるの？」と質問した。担任が「そうだね。長い針が6になったらかな。」と言うと、K児は友達と保育室内にあるホワイトボードに「6」と数字を書き、教師がフェルトで作った時計（針が動かせるようになっているもの）の針を「6」に合わせた。

＜事例5 考察＞

幼稚園には小学校のように決まった時間割があるわけではなく、比較的柔軟な時間の中で日々生活をしている。観察していた幼稚園でも時間割はなく、片付けの時間やお弁当の時間が決まっているわけではなかった。子どもたちは、幼稚園で遊びと生活をしながら暮らしづくりをしている。片付けも生活の見通しをもって、必要観を感じてしているのだ。決まった役割があるわけではないが、片付けをする中で、自然に役割分担が行われ、それぞれがはりきって片付けをしている。そしてみんなで協力して保育室をきれいにするという目的に向かっている。

これは幼稚園児らしい姿であり、こういった姿は、小学校以降の教育のみならず、人が生きていくうえでの土台になることだといえる。K児が担任にお弁当の時間を聞いたことも見通しをもつうえで重要なことであり、その回答を、教師が時計を用いたり、数字であ

らわしたりすることも、子どもたちが、自然な流れの中での文字や数量への興味関心をもつことにつながる。子どもたちは遊びや生活の中でこうして生活や学習に必要なこと等を身に付けていくのである。これらはまさに小学校の学びにつながっている。

事例6（2022.2.25）

担任と一緒に小学校に見学に行くことになった。1年生がが使用している庭で小学生が使っている遊具で遊び、1年生の昇降口から小学校に入り、1年生の教室がどこにあるのか、保健室がどこにあるのか、先生たちはどこにいるのかなどを見学してきた。見学を終えて、幼稚園に戻ってくると、K児は友達と「小学校楽しかったね。また行きたいね。」と話をしていた。

その日のふりかえりで担任が「また行きたい人」と言うと全員が手を挙げて、担任が「今度は1年生と一緒に遊んでもらおうか」と言うとみんな嬉しそうな顔をしていた。

<事例6 考察>

年が明けて、子どもたちも自分たちが小学校に行くことを意識し始めるようになる。観察した幼稚園では、カリキュラムの中に「小学校との交流」が組み込まれている。「交流給食」といって、小学校の給食を幼稚園で体験すること、次に実際に小学校にいて、1年生と一緒に給食を食べること等が体験としてある。さらに、年長児が小学校に行き小学校の庭で遊んだり、校内を見学したりすることをする。そして子どもたちの思いも聞きながら何回か小学校1年生と直接的な交流をもつ。この交流は年長児にとって小学校への期待感が増すだけでなく、1年生自身も年長児の面倒をみることで「大きくなった自分」を感じる機会になっている。

幼小接続においてこうした直接的な体験の交流は大きな意味があると考え。子どもたち自らが小学校という場所や1年生の生活等を、見たり聞いたりして、体験し感じたことは、教師が言葉で伝えるよりも実感を伴ったものになる。

また、子どもたちだけでなく幼稚園と小学校の教師間でもやりとりが生まれることで、互いの子どもたちの発達段階や教育を知る機会になるともいえる。

(2) K児の1年生前期の事例

事例7（2022.6）図工の授業

図工の授業でこすりだしをしていたK児。はじめは、ひたすらこすりだす行為を楽しんでいるようで、同じ色（赤）で何度も繰り返しこすりだしをしていた。「もっと○の数が多かったらたくさんできるのに。」（配布された紙はこすりだしをする場所が○で示されていた）と、つぶやきながら行っていた。友達が何枚もやっているのを見るとK児も嬉しそうに先生のところに行き、もう一枚紙をもらいに行ってこすりだしをした。次の紙は別の色を使ったり、いろいろな模様を見つけてこすりだしをしたり夢中になって行っている様子が見られた。そのうち「これは亀の甲羅みたいだな」とか「これは○○みたい」というように、こすりだしをした模様からいろいろなことをイメージしているようであった。K児はまた別の紙に自分で絵を描き、家の屋根の部分でこすりだしで描いたり、こすりだしをした○を切って貼ったりしながら活動を楽しんでいた。

途中、女兒がK児に話しかけると、K児は嬉しそうに自分の作品について語っていた。その後K児も友達のところに見に行っていた。

<事例7 考察>

K児は「やりたい」という思いをもって活動に取り組んでおり、試行錯誤しながら繰り返しこの日の活動であるこすりだしを楽しんでいた。途中友達とやりとりすることを楽しむ姿もあった。小学校においても、自分なりの「やりたい」や「こうしてみよう」という思いが大切にされ、楽しく学んでいる姿が見られる。小学校の授業においても自分なりのやり方や楽しみが保障され、子どもの主体性が大切にされている。これは幼児教育で子どもの主体性や自主性を大切にしていることとつながる。

小学校の教育を、ずっと座っていて、黒板に書かれたものをノートに書いて、教師が一方的に話をして…と思っている幼稚園教員も少なからずいる現状がある。しかし、授業観察をしてみるとむしろそのような姿は少なく、子どもたち自身が自分たちで考えたり学んだり、友達と試行錯誤したりする姿が多く見られる。まずは小学校の教育を知ることとも幼稚園教諭にとって重要なことである。

K児がはりきって活動しているのは、自分なりの学びにおいて自分なりの楽しみが保障

されていたり、友達の刺激を受けたり、こうした小学校の授業の在り方も大きいと考える。子どもたちは幼児期に試行錯誤したり失敗をしたりを繰り返しながら自分で考えていくことをしている。また、「やりたい」「もっとやりたい」という思いを抱きながら遊んでいる。そうした幼稚園の生活や発達段階を理解することも幼小の接続にとって重要だといえる。

事例8（2022.10）図工室の環境設定から

動物と動物を組み合わせて自分のオリジナルの動物を作るという図工の授業では、図工室の壁一面には、様々な種類の動物の拡大写真が掲示されていたり、子どもたちの作った作品を貼る場所が複数設定されていたりした。子どもたち自身が写真を参考にしたり、貼る場所を自分で選んで決められるようになっていたり、図工室全体が、わくわくするような「おもしろい」「やってみたい」と思うような環境になっていた。

K児は図工室の写真を一通り見まわしながら、友達と「これとこれを合体してみようか」と言って楽しそうにオリジナル動物を描いていた。出来上がった作品を嬉しそうに貼る場所に持っていき、それを持ちながら、それらを背景に自分でつくったオリジナルの物語を友達に話していた。

<事例8 考察>

幼児教育では、遊びを通した総合的な指導を、環境による保育の中で行っている。環境には人的環境、物的環境、自然環境があり、環境のもつ意味は大きい。それらを踏まえて、子どもたちの保育の環境を設定し、何をどこにどのくらい置いたらよいか、教師の立ち位置はどうするか等を考えて決めている。そして日々の保育の中で、環境に保育のねらいや意図を込めている。

小学校の授業観察をした時に、事例9の図工室の環境は図工室に入った瞬間から「今日は何をするんだろう」と子どもがワクワクするようなものであった。また、学習のねらいを達成するためのヒントや援助となるようなことが環境に込められていた。

小学校においても、環境設定が重要であるとともに、幼児教育から小学校教育へと移行していく中で、子どもが自由に環境の中で楽しく学ぶことができるのは、幼小の段差を感じずにスムーズに学べる要因にもなっているといえる。

事例9（2022.10）生活科の授業

生活科の授業では、身近な素材（お菓子の空き箱やペットボトルなどをそれぞれが

持ち寄る)を教材に、ドミノ倒しの遊びをしていた。ドミノ倒しを階段で行ったり、廊下で行ったり、子ども達自身が好きな場所を選んでグループで活動していた。ドミノの倒れる様子を、iPadを使って撮影し、自分達で見ながら「もっと倒れるにはどうしたらよいか」や「ドミノをできるだけ長くするためにはどうしたらよいか」を自分達で考え、時には失敗をしながらもグループで話し合い協力しながら活動していた。

K児もはじめは自分が持ってきた素材を並べて自分でドミノを倒すことを楽しんでいたが、そのうち友達の作ったドミノと合体して倒し始めた。すると今度は「持ってきた箱を大きい順番に並べてみよう」といって箱の大きさを比べてドミノをならべ始めた。全て並べて倒してみたが、途中で止まってしまった。「これは軽いからうまくいかないのかな」「もっと箱と箱を遠くにしたら長いドミノになるかも」と言いながら、iPadで撮影し、それらを友達と見ながら楽しそうに活動していた。

事例10 (2022.8~9) 生活科の授業の教材研究から

事例9の生活科の授業実践には幼稚園教諭も関わった。

事前に小学校1年生担任の教諭が「生活科でおもちゃ作りの単元で授業を行う予定なので、幼稚園でどんなことで遊んだり、子ども達がどんなことに楽しみを感じたり、こういったことを経験しているかを教えてほしい」ということで幼稚園をたずねてきた。そこで幼稚園での子ども達の姿を、ドキュメンテーションを共有する形で話をしたり、カリキュラムにそって話をしたりした。

そういったことを経て、幼稚園教諭と小学校教諭で、どんな授業にするかを話し合い、一緒に授業単元を考え授業作りを行うことになった。夏休みには一緒に教材を持ち寄って教材研究をしながら、予想される子どもの姿を話し合ったり、それぞれの発達段階や教育の話をしたりすることを重ねてきた。

そして事例9の授業が作りあげられた。

<事例9及び事例10 考察>

事例9のK児の姿は幼稚園の遊びの姿の夢中になり没頭する姿に近いものがあつた。しかし、iPadを使ってふりかえりをするという姿は小学生の学びの姿である。一人一台端末で学ぶということが定着し始めた小学校の教育では、ICTの活用が様々な授業で行われている。では、それが幼児教育でできないことかということそうではないと考える。幼児教育においてもICTを活用していくことは、幼小接続のつながりにもかかわるといえる。

直接体験を大切にしながらも、遊びの中でICTを活用することは有効であろう。

事例9の授業は、事例10のような幼稚園教諭と小学校教諭のやりとりがあつてのことであつた。事例9の授業そのものは、授業において、子ども自身の自己選択や自己決定が大切にされていたり、試行錯誤が大切にされていたり、幼児教育で大切にしていることがたくさん見られた。それには、事例10のような経緯があり、子どもの姿を幼稚園教諭と小学校教諭が共有し、対話を重ねていくことで幼稚園での学びを考慮した授業づくりをしたいという小学校教諭の思いがあらわれたものであつた。そして、幼稚園教諭も教材研究や授業づくりに参加する等、幼稚園教諭も小学校の教育を知るきっかけとなつた。

こうして幼稚園教諭と小学校教諭が互いの発達段階や教育を知ることは幼小接続において非常に重要だといえる。直接的に関わるのが難しくても、相互観察の機会を設けたり、子どもの姿を共有したりすることは連続性を考慮した幼小接続の在り方を考えるうえでも重要である。

事例11（2022.5～6）授業中のK児の発言から

「先生知ってる？小学校には「制限時間」があるんだよ。幼稚園の頃は好きな遊びを好きなだけしていたでしょ。だからぼくは好きな遊びをたくさんして幼稚園が楽しかったよ。でもね、小学校はそうじゃないんだよ。でもね、先生、ぼくは、制限時間の中で、どうやったらできるかを考えるのも楽しいんだ。だから、小学校も楽しいよ。」
(2022.5)

「先生、今ね、授業で、仲良くしてくれた2年生に手紙とプレゼント作ってるんだ。2年生がめちゃくちゃ優しくしてくれたからぼくスペシャルな折り紙作ってるの。ぼく幼稚園の頃工作が好きだったんだ。折り紙も得意だから。先生にもこれ（折り紙）あげる？ぼく、こんなこともできるようになったんだよ。先生（幼稚園の元担任）も欲しいかな。こんなことできたなんて知ったら先生は目を丸くして驚くだろうな。」
(2022.6)。

<事例11 考察>

この事例の「先生」というのは筆者のことである。K児自身の姿を昨年度から継続的に観察していたこともあり、小学校の授業観察にいくとK児はいつも筆者に話しかけにきた。事例10のK児の発言はそれぞれ5月、6月に授業観察にいった観察を終えた休み時間のときの出来事である。

K児の「時間制限」という発想には驚いたが、これこそまさに、時間割が合ってチャイムが鳴る小学校の生活と、時間割がなく、子どもの遊びが存分にできる幼稚園の違いだといえる。K児自身が幼稚園と小学校の違いを感じながらも、それぞれの良さに気づいているともいえる。幼稚園時代がK児にとって良い思い出であると共に、環境の変化や生活の違いを感じている小学校でも自分なりに楽しみを見つれたり順応したりしようとする姿がうかがえる発言である。子どもなりにこうした違いに気づき、それらを乗り越えようとしていることこそが、幼小の接続に必要であり、それを支援していくのが教師の役割であるともいえる。反対に、教師がそれらを先に取り除いたり、その違いを必要以上に知らせたり、必要以上に手伝ったりすることは、子どもの学びを止めてしまうことにもつながりかねないといえる。

K児が幼稚園時代の遊びや自分の得意だったことをふりかえりながら、小学校でもそれらを生かそうとしていること分かる事例10の発言からは、まさに幼稚園の学びと小学校の学びがつながっているといえる。カリキュラムに位置付けたことで学びがつながることも重要であるが、こうして子ども自身が学びのつながりを感じることも、学びの連続性を考慮した幼小接続で大切にしたい姿であるといえる。

事例12（2022.7）K児の担任との語り合いから

K児の追跡調査をする中で、K児の担任と話す機会が増えた。授業後にK児や授業について話すこともしてきたが、ここでは、K児の担任と放課後に「幼小接続の在り方について」語り合ったものの一部抜粋を記載する。

【語り合いの記録より（一部抜粋）】

小学校教諭「小学校1年生の担任に、率直にどんなことを伝えたいですか」

幼稚園教諭「年長児は、幼稚園の中では最高学年として、特に後半になってくると、自分のことや学級のことだけでなく、幼稚園のことを考えて生活するような姿が見られる。いろいろなことができるようになり、大きくなったことを実感し、自信をもってはりきって生活している。できることなら、小学校でもその一人ひとりのはりきりを生かしてほしい。」

小学校教諭「小学校に入学すると、小学校の一番下の学年になり、給食や清掃など、上級生が教えにきたり代わりにやったりしている。それが当たり前になっている部分がある。しかし、一人ひとりが、何ができて何に困っているかをもっとしっかりと見て、できることは任せて、手伝いが必要なことを手伝うようにするとよいかもしれない。」

小学校教諭「幼稚園での学級担任で意識していることを聞きたい」

幼稚園教諭「32名の子ども達と日々暮らしづくり（遊びと生活）をしているわけであるが、私は学級集団というより、一人ひとりをみることを意識している。一人ひとりの個性や良さがきちんと出るような学級経営をしていきたい。そのために、一人ひとりをしっかり見て、耳を傾け、個に応じた指導を心掛けている。これは幼児教育の特徴の一つかもしれない。」

小学校教諭「自分は、学級を集団としてみている。1年生でいうと、いかに集団の中で生活できるかということを考えていた。しかし、幼児教育で個に応じた指導を大切にしていると聞いて、集団も大切であるが、もう少し、一人ひとりを見ながら、その子の学びや育ちを考えていければとも思う。」

【語り合いの数日後 K児の担任より（一部抜粋）】

「幼稚園の先生の話聞いて、子どもへの向き合い方や教育の在り方、そして教師の思いなど改めて考える機会になった。幼稚園の先生と話をさせていただき、幼小接続がハード面の整備でなく子どもの中身をつないでいくようなものでありたいと改めて思った。」

＜事例12 考察＞

小学校教諭とこのような機会を設けることそのものが幼小接続にとってはとても意味のあることである。この語り合いでは、幼小接続について何か結論を出すというよりも、まずはそれぞれが思ったことをそのまま語り合うこととした。それは、それぞれの発達段階や教育について知ったり、それぞれの特性や良さに気付いたり、そして何よりも子どもの姿を共有して、今後の自分たちに生かしていくことを目的としたからである。

幼稚園の年長児は幼稚園の最高学年として幼稚園のことを考えて行動したり、なんでもやってみようと挑戦したりしながら、できた喜びを味わって自信につなげ、一人ひとりがはりきって生活している姿がある。そのはりきりが小学校でも生かされると、子ども達の学びや育ちがストップせずに、連続性の中で学びを保障するとともに、円滑に接続が行えるといえる。

語り合いにおいて学級経営の中で大切にしたいことも、幼稚園と小学校で異なっていたが、それはそれらが真逆の考え方であるとか、学びの連続性が感じられないとかそういうことではないと考える。むしろ、それぞれが何を大切にしているかを知ること、そのつながりを考えることこそが、円滑な接続につながると考える。

語り合いの数日後、改めて小学校教諭から言われたことが、まさしく学びの連続性を考慮した幼小接続の在り方であり、その思いを共有できたことは幼小接続において大きな意味をもつといえる。

(3) K児の年長児後期～小学校1年生前期の事例からの総合的な考察

一つ一つの事例を学びの連続性という視点から考察すると、改めて子どもの学びは連続性の中にあるということがいえる。だからこそ、子どもの学びは連続性が考慮されたうえで保障されていかなければならないのだ。

幼小の接続期の子どもの姿を継続的に見ていくことは、まさに幼小接続の実態を見ることでもある。事例研究を通して明らかになった、幼小接続のために必要なことを以下に述べる。

第1に、子どもの学びの過程をじっくりと見ること、それらの記録を積み重ね、それらを開かれた記録にすること。つまり、記録を記録のままにして残して終わりにするのではなく、それらを物語として語れるようにすること。教員間で共有したり、それらをもとに子どもの学びや育ちについて対話したり、幼小接続の視点で小学校の共有と活用したりすることが大切である。さらに、幼児期の遊びが学びであり、その学びが小学校以降の学びの土台であり、連続性の中にあるということを認識し、幼児期の子どもが遊びの中で、何を感じたり考えたり、試したり確かめたりしているのかを捉えながら記録に考察を加え、それらを次につなげていくという認識が必要だと実感した。それは記録が評価でもあるといえる。PDCAをサイクルさせるためにも、子どもの姿、学びの過程をしっかりと見ることは、幼小の接続以前の子どもの学びの保障である、子どもの学びの連続性を意識するうえで重要だといえるだろう。

第2に、それぞれの教育を知ることの重要性である。子どもの学びは連続性の中にあるのは当たり前のことであるが、それを認識しているだけで幼小接続が円滑に行えるわけではない。就学前の子どもの教育で何が行われているか、具体的にどのような経験をしてきているかを知る必要があるといえるし、小学校入学以降にどのような教育のもと子どもたちが学んでいくかを知る必要がある。それらを知るためには、先述したように、子どもの姿を共有し、対話することはもちろん、カリキュラムとしてつながるということも重要であろう。しかし、事例研究において実感したこととして、いきなりカリキュラムでつながるのは難しいということだ。それだけでなく、カリキュラムのみをつないで、子どもの姿が繋がっていないのは、幼小接続が形骸化していくことになりかねない。つまり、子ど

もの姿を踏まえたうえでカリキュラムがあるということである。そのためには具体的にまずは自分自身が自分の校種の子どもの学びの過程を理解したうえで、相互に観察をする必要があるといえる。さらには観察後にリフレクションするなどの時間を設け連携を図ることが重要である。それらが幼小接続の円滑な移行につながっていくといえる。

第3に、第1第2を踏まえた上で、連続性を考慮した教育の在り方を考えていく必要があるといえる。幼小接続において何をどのようにつなぐとよいかを「個（一人一人）」でつなぐ、「保育・授業」でつなぐ、「カリキュラム」でつなぐといったように、観点をもって整理しながら実践していく必要性がある。

幼小接続は、子どもたちが小学校入学時に戸惑ったりつまずいたりしないようにすることや、教師が一方的に段差を取り除いてしまうのではなく、学びの連続性の中で、子どもにとって何が必要で、何をどのようにするとよいかをしっかりと考え、その場しのぎではなく、その後の学びにもつながっていくように保障していくことが重要であるといえる。

4. 研究の成果と課題

子どもの学びの姿を可視化する手法として「ドキュメンテーション」という手法を取り入れたことで、学びの過程を丁寧に見取り記録を積み重ねることができた。ドキュメンテーションは実践記録であるが、「記録」がなんのためにあるのかということについても再考することとなった。記録をこうして改めて事例にし、その子の学びの過程をじっくり見つめなおし、考察を加えて考えることで、新たな視点から子どもの学びを考えることにもつながった。本研究では「幼小接続」「学びの連続性」という視点から、学びの連続性を考慮した幼小接続の在り方を考え、その具体的な取り組みを明らかにすることができたことは成果といえる。さらに、子どもの学びの過程の事例を考察することで、改めて、自身の発達観や保育観、人間観等を見つめ直すこともできた。

本研究において、一人の子どもの幼小の接続期の実際にふれ、継続的に観察し、記録を積み重ねたこと、それらを事例として学びの連続性の視点で考察したことは、幼小接続の在り方を考えるうえでも大きな意味があることであった。幼児期だけでなく、1年生入学後に小学校でどのように学んでいるかの追跡調査ができたことは、幼小接続において、子ども自身が何につまずき、どのように乗り越えていくかを見るためには有効であった。また、事例に考察を加えながら、子どもの学びの過程を見ていくことで、幼児期の遊びが学びであるということを再認識できたことも成果といえる。

幼児教育は見えない力を育てているといわれている。しかし、一方で、学びが見えにく

いせいか、子どもの遊びがただ何気なく遊んでいるようにしか見えないといわれることも少なくはない。子どもの遊び、つまり学びの過程を可視化することは、見えない力を見えるものにするともいえる。意識的に子どもの学びの姿を可視化し、記録をする等してそれらを活用していく必要がある。

本研究で、幼児期の子どもの遊びは学びであり、それらの学びが小学校以降の教育の土台になっているということがいえた。つまり、子どもの学びは連続性の中にあり、つながっているということである。また、本研究において、子どもの姿を通して、小学校教諭といろいろな接点を持ち、学びの過程を共有し対話を重ねてきたこと、そのことが、幼小接続の重要な役割であるといえる。子どもの姿を共有し、それらを基に「幼小接続に必要なことは何か」を小学校1年生の担任と語り合えたことは、幼小接続において大きな意味をもつ。

今後は、幼小接続について、小学校の教諭と共に子どもの姿を共有したり子どもの姿をもとに対話したりしながら、どの子どもも、円滑な接続ができるように、本研究で明らかにした具体的な取り組みを多くの幼児教育施設や小学校に広げ、実践につなげていきたい。さらに今後は、本研究で明らかにした幼小接続の在り方から、カリキュラムを考えていくようなことをしていきたい。そうすることが今後の円滑な幼小接続につながり、学びの連続性を考慮したうえで、子どもの学びを保障することにもつながると考える。幼児教育施設の教員と小学校の教諭が共に、スタートカリキュラムやアプローチカリキュラム、ジョイントカリキュラムといったようにカリキュラムをつなぐという視点からも学びの連続性や幼小接続について考えていきたい。

5. おわりに：今後に向けて

本研究から幼小接続に必要なことや大切にしたいことを検証し、具体的な取り組みを提案できたことは大きな成果であった。一方で、本研究の内容や成果は附属学校園の特性によるものも大きい。幼小接続に必要な教育として一般的に全ての子どもに対して有効であるかの疑問が残った。今後はそれらが一般的にもあてはまるかどうかの検証が必要である。

低年齢で子どもを幼児教育施設に預けるニーズが多いこと、保育の在り方が多様化していること等から、現状として様々な形態の幼児教育施設がある。また、公立小学校へは複数の幼児教育施設から子どもたちが入学している。小学校への接続を考えると、今後は保育園、認定こども園を含めた「幼保小の接続」から接続期の教育の在り方を検討することが必要である。また、本研究を通してカリキュラムの重要性を再認識した。接続に視点をあて学びの連続性を考慮したモデルとなるスタートカリキュラムを検証し、学びの連続性

に必要な教育を検討することを今後の研究課題としたい。

【引用・参考文献】

- ・ 幼稚園教育要領
- ・ 保育所保育指針
- ・ 幼保連携型認定こども園教育・保育要領
- ・ 令和5年2月27日中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会資料
- ・ 秋田喜代美, 松本理寿輝 (監修) 東京大学大学院教育学研究科附属発達実践政策学センター
まちの保育園・こども園 (編著) (2021) 『保育の質を高めるドキュメンテーション園の物語の探究』 中央法規
- ・ レッジョ・チルドレン (著) ワタリウム美術館 (編) (2012) 『レッジョ・エミリアの幼児教育実践記録子どもたちの100の言葉』 日東書院
- ・ マーガレット・カー ウェンディ・リー (著) 大宮勇雄・塩崎美穂 (訳者代表) (2020) 『学び手はいかにアイデンティティを構築していくか 保幼小におけるアセスメント実践「学びの物語」』 ひとなる書房
- ・ 中井結貴, 長谷部せり, 稲川知美, 鈴木紀子, 高根沢伸友, 青柳宏 (共著) (2022)
「幼小接続・連携に係わるインタビュー～幼小における「学び」と育ちの接続をもとめて～」『宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要第9号』
- ・ 長谷部せり, 稲川知美, 青柳宏, 他10名 (共著) (2022) 「幼稚園におけるドキュメンテーション—写真を介して語り合う—」『宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要第9号』